

第1部 エッセイ

テーマ「おむすび」

一般の部

佳作

カチカチのおむすび

横尾 春樹

五年前のことになる。当時私は、心身の不調によつてやむなく福祉の職を辞していた。次の仕事を探さなくてはと思うのだが、どうにも気力が沸いてこない。食欲も、人と話すエネルギーもない。そんな私を見かねた友人が山の仕事を紹介してくれた。

仕事の内容は樹種や木々の生育状況調査。一緒に仕事をするSさんは、長い間林業に携わってきた、樹木医の資格も持つ七十歳過ぎの穏やかな人だった。

「無理せんでな。ゆっくらやったらいいでね」

そんな言葉をかけてくれたり、私が慣れない山歩きでへばったときには笑顔で「ほれ、もう少しでお昼だ、早く出して頑張るぞら」そう言うて励ましてくれた。

昼食は妻がおむすびを作ってくれていた。弁当箱に三角おむすびが3つ。

それを見ておいしそうだと、思う。しかし、山歩きで腹は減っているはずなのに、どうにも食べられない。なんとか1つを食べるのがやっとだった。

それでも澄んだ空気の中での、余計な気を遣わなくてすむSさんとの作業は、どうにか続けることができていた。

ある日、昼になりいつものように弁当箱を開けると、そこにはいつもと違っていくらか小ぶりな、そして丸いおむすびが3つ入っていた。ふと見ると、メモと一緒に入っている。

『おとう だいすき』

小学1年生の娘の拙い字で書かれていた。

その瞬間、私の頭から心へと続く暗いトンネルに温かな光が差し込んだような気がした。

手に取ったおむすびはカチカチに固かった。き

つと、何度も何度も繰り返し握ったのだろう。おそらく私のことを想ってくれながら。

その日、私は3つのおむすびを全て平らげることができた。

そして今、私は再び福祉の仕事に就いている。私もまた支えられていることに感謝しながら。